

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

インヌマエル

――イザヤ書第6、7章――

1957年12月22日

小池辰雄

真剣勝負のクリスマス 火焰天使 栄光は全地にみつ 聖なるかな イザヤの召命 十字架・復活のキリスト 我をつかわしたまえ されど悟ることなかれ 祭司と預言者 聖き種 神の靈法 シャルヤシュブ 信ぜずば立つことを得じ 神の栄光の体現体 私を本当に求めよ インヌマエル 我れ汝と共に インヌマエルのキリストわがうちに 祈り

【イザヤ6】

1 ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾は殿にみちたり。2 セラピムその上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔り。3 たがいに呼びいいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ。4 かくよばわる者の声によりて闕のもし揺りうごき家のうちに煙みちたり。このとき我いえり、禍いなるかな我ほろびなん、5 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼はばんぐんのエホバにまします王を見まつればなりと。

6 ここにかのセラピムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手にならずさえて我にとびきたり。7 わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれなんじの罪はきよめられたりと。8 我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん誰かわれらのために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此にあり我をつかわしたまえ。

9 エホバいいたまわく、往きてこの民にかくのごとく告げよ、なんじら聞きてきけよ然どきとらざるべし、見てみよ然どしらざるべしと。10 なんじこの民のこころを鈍くし、その耳をものうくし、その眼をおおえ、恐らくは彼らその眼にて見その耳にてききその心にてきとり翻えりて醫さることあらん（なからんためなり）。11 ここに我いいけるは、主よいつまで如此あらんか。主こたえたまわく、邑はあれすたれて住むものなく、家に人なく、邦ことごとく荒土となり、12 人々エホバに遠方にまでうつされ、廃りたるところ国中におおくなりん時まで、如此あるべし。13 そのなかに十分の一のこる者あれ



ども、此もまた呑みつくされん。されど聖裔のこりてこの地の根となるべし。彼のテレビントまたは櫛樹^{かしのき}がきらるることありともその根ののこるがごとし。

【イザヤ7】

1 ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズのと看、アラムの王レヂンとレマリヤの子イスラエル王ペカと上りきたりてエルサレムを攻めしがついに勝つことあたわざりき。2 ここにアラムとエフライムと結合^{むすびつら}なりたりとダビデの家につぐる者ありければ、王のこころと民の心とは林木の風にうごかざるが如くに動けり。

3 その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは、今なんじと汝の子シャルヤシユブと共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池^{かみのいけ}の樋口にゆきてアハズを迎え、4 これに告ぐべし、なんじ謹みて静かなれ、アラムのレヂン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二つの燼^{もえのこ}余りたる煙れる片柴^{はしば}のごとし。懼るるなかれ、心をよわくするなかれ。5 アラム、エフライム及びレマリヤの子なんじにむかいて悪しき謀^{はかり}ごとを企てていう、6 われらユダに攻め上りて之をおびやかす我等のためにこれを破りとり、タビエルの子をその中^{うち}にたてて王とせんと。7 されど主エホバ云いたまわく、この事おこなわれずまた成ることなし。8 アラムの首^{かしら}はダマスコ、ダマスコの首はレヂンなり。エフライムは六十五年のうちに敗れて国をなさざるべし。9 またエフライムの首^{かしら}はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子なり。若しなんじら信ぜずばかならず立つことを得じと。

10 エホバ再びアハズに告げて言いたまわく、11 なんじの神エホバに一つの予兆^{しるし}をもとめよ、或はふかき処あるいは上のたかき処にもとめよ。12 アハズいいけるは我これを求めじ、我はエホバを試むることをせざるべし。13 イザヤいいけるは、ダビデのいえよ請うなんじら聞け、なんじら人をわずらわしこれを小事^{ちいさし}として亦わが神をも煩わさんとするか。14 この故に主みずから一の予兆^{しるし}をなんじらに賜うべし。視よおとめ孕^{はら}みて子をうまん。その名をインヌマエルと称うべし。15 かれ悪をすて善をえらぶことを知るころおいにいたりて乳酥^{にゅうそ}と蜂蜜とをくらわん。16 そはこの子いまだ悪をすて善をえらぶことを知らざるさきになんじが忌^いみきらう両^{ふたり}の王の地はすてらるべし。17 エホバはエフライムがユダを離れし時よりこのかた臨みしことなき日を汝となんじの民となんじの父の家とにのぞませ給わん。是アッスリヤの王なり。

18 其日エホバ、エジプトなる河々のほとりの蠅をまねきアッスリヤの地の蜂をよびたまわん。19 皆きたりて荒たるたに岩穴すべての荊棘^{いばら}すべての牧場^{まきぎ}のうえに止まるべし。



20 その日主はかわの外^{むち}うより雇えるアッスリヤの王を剃刀^{かみそり}として首と足の毛とを剃りたまわんまた髯^{ひげ}をも除きたもうべし

21 その日人わかき雌牛ひとつと羊ふたつとを飼いおらん。22 その出すところの乳おおきによりて乳酥^{にゅうそ}をくらうことを得ん。すべて国のうちに遺れるものは乳酥と蜂蜜とをくらうべし。

23 その日千株^{ちちもと}に銀一千の価をえたる葡萄ありし処もことごとく荊^{せい}と棘^{いばら}はいづべし。24 荊とおどろと地にあまねきがゆえに人々矢と弓とをもて彼処にゆくなり。25 鋤^{すき}をもて掘りたがえしたる山々もいばらと棘のために人おそれてその中にゆくことを得じその地はただ牛をはなち羊にふましむる処とならん

●真剣勝負のクリスマス

集会を始めましたのは1940年でありまして、今回が1957年で17年目になります。戦争中、クリスマスを迎え得なかったこともありますが、10数回のクリスマスを迎えたこととなります。世界の情勢もいろいろな深刻な様相を示しております。その点で我々このクリスマスというものを決して単なるお祭騒ぎで迎えるわけにいかないのであります。東京の人は百貨店のデコレーションをもつてクリスマスに代えているようですが、また、イギリスでも妙にサンタクロースがはやるので、牧師さんたちがそのサンタクロース・クリスマスに反対しているというようなこともキリスト教新聞に出ている。我々もキリスト者としてクリスマスを迎えることが年中行事であつてはならないので、これは真剣勝負です。今日はイザヤ書の6章、7章を、それから祈祷会ときには8章をいたすつもりです。イザヤ書6、7、8章をもつて今日一日を迎えたいと思います。イザヤ書6、7、8章をもつてクリスマスを迎えるのは実は今日が初めてです。ある特別な意味を感じるのであります。

●火焰天使

イザヤ書6章です。

「ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座^{みくら}にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾^{もすそ}は殿^{との}にみちたり。

預言者イザヤという人は旧約の最大の預言者と言つて過言でないと思います。イスラエルは、南ユダ王国と北イスラエル王国に、紀元前950年頃に分裂いたしましたして、南北王朝が並行して対立して進んでいた。一方、西の方にはエジプトがありました。それから、北の方にシリヤ、更に東北の方にアッシリヤというのがあつた。預言者イザヤが現れた時には、エジプト、シリヤ、アッシリヤというのがその隣国であつた。バビロンもその陰にあります。やがてアッシリヤを倒すことになります。イザヤが預言したのは大体、紀元前745年から700



年頃の間です。南王国ユダの預言者です。仕えた王様はウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキア、マナセというわけです。今、当面の問題になっている王様はウジヤの次のアハズです。

「ウジヤ王の死にたる年

というのは大体、紀元前⁷⁴⁰年ないし731年というようなところです。

われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾は殿にみちた^{もすそとの}り。

イザヤはもちろん霊的な眼をもつて霊視しているわけです。

²セラビムその上にたつ、

「セラビム」は火焰天使。非常に炎の輝きを持った天使らしい。「セラビム」というのは複数形です。

おのおの六つの翼あり、その二つをもて面をおおい、その二つをもて足をお

おい、その二つをもて飛翔^{とびかけ}り。

「二つをもて面をおおう」ということは、神に対する畏敬の念。神の輝きはどうてい直視するに耐えない。私たちも太陽が非常に輝く時は直視できません。神の輝きに直視できない。また、それに対する畏敬の念で面を、目を覆うわけです。

「その二つをもて足をおおう」というのは謙譲、謙遜の相とみてよろしいと思います。

「その二つをもて飛翔^{とびかけ}り」と。これは神の命のまにまに自由に奉仕するその姿。マルチン・ルターが、

「すべてのクリスチャンは自由であり、かつまた一切のものの僕である」

と言いましたが正に、翼で飛びかけて、神の命のままに飛び動くその自由さとその僕の姿とが、この「二つの翼で飛びかける」ということ。翼が六つあって、それぞれの相が、畏敬と謙遜と自由奉仕といったような姿を表していると思われれます。

●栄光は全地にみつ

³たがいに呼びいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホ

バその栄光は全地にみつ。

「聖なるかな」というへブライ語は「カードーシュ」という。

「聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ」

と。「栄光」という字は「カーボード」という。非常に著しい言葉で、黙示録の中にも出てきます。私たちの普通の現実においては、

「神の栄光は全地にみつ」

ということとはわからない。太陽の光は全地に満ちています。太陽の光は全地を遍照している。遍く照らしている。我々のこの罪の目には見えないけれども、神の栄光は、太陽の光よりもはるかに素晴らしい霊的な光です。「栄光」という字は、非常に「莊嚴」な気持も持った



字で、もし、神の内側の本質が何であるかというならば、「聖」「カードーシュ」であります
が、それが外に表れては何かというと、「カーボード」です。栄光、莊嚴。聖なるものは外
に光となって表れる。神聖なるものは外には光となってある。神の本質の表れとしての栄光、
カーボードです。それは私たちの罪ある目には見えないけれども、全世界を覆っている
ころの、どんなにこの世界が暗雲と混沌でありましても、神の栄光は、見る目あるものを
もつてするならば、これは全地に満ちている。

キリストがマタイ伝の山上の垂訓で言われた有名な言葉、5章45節に、

「⁴⁵これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父はその日を悪しき者
のうえにも、善き者のうえにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者
にも降らせ給うなり。……⁴⁸然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」

(マタイ5・45～48)

と。相手が正しかろが正しくなろうが、直かろうが直くなくろうが、清かろうが清く
なろうが、神は日の光を一切のものに照らしめ、また雨を一切のものに降らしめる。恵
みは来ているんです。

私たちは、このお天道さんがなかったら、生きていられない。また、水がなかったら、
生きてられない。このように恵みは万人に遍く等しく来ています。

「私はお天道さんの光は要らん。電気で生きる」

とやっていたら、その人は必ずなにか病気になるってしまう。

「神さまはあるものか」

と言っている人も、神さまのこの恵みの中にはある。これは仕方がない。信ずるも信じな
いもない。すべて神の恵みの中に取り入れられている。

私たちはこの神の恵みに気がつくかどうか。神の恵みにハタと気がつくことが信仰とい
うことなんです。なにも難しいことではない。神さまの恵みにハタと気がつくということ。
けれども、その気がつきがなかなか気がつかない。私たちは、イザヤが

「栄光が全地にみつ」

と言った、この神の栄光に本当に気がつくか。なかなかこれが気がつかない。見えないも
のですから。

●聖なるかな

ところが、イザヤは、これは深い祈りの世界でこれに遭ったに相違ない。彼は祈りの世
界でこの偉大な神の栄光の中に取り入れられた。そして、火焰天使がこのような相をもつ
て駆け廻っている姿を見せしめられた。

⁴かくよばわる者の声によりて^{しきみ}闕^{しきみ}の^{しきみ}揺りうごき家のうちに煙みちたり。

もうこうなると、わからんですね、何のことか。驚天動地といいますが。たとえば、キ



リストが十字架上で叫ばれたら、エルサレム神殿の聖所と至聖所の間の幕が二つに裂けたという。また、リストが復活なさる時には、ローマの番兵が堅く守っているところの石の扉が転がされてしまった。神の栄光の前には、

「**閼**のもとい揺りうづき家のうちに煙みちたり」

という、何か霊的な現象がそこに顕れてきたに相違ない。モーセがホレブの山に行った時も、霊の火が燃えていました。

このとき我いえり、禍いなるかな我ほろびなん、

いや実に、「わざわいなるかな、我ほろびぬ」と、ほとんど完了に訳してもいい。「我ほろぶ」と言ってもいい。「ほろびなん」ではちよつと弱い。

5 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼はばんぐんのエホバにまします王を見まつればなりと。

イザヤが「聖」と言う言葉は、「分かつ」という意味を持っております。「聖なるかな」というのは正に、人間とは超絶の神。一切の時間空間を超絶している。そして、時間を把握し、空間を把握しているところの神が、これがその「聖なる神」。この聖なる神の栄光の前に、カーボードの前に、完全にイザヤが自覚するところは、

「自分が罪であり、汚れである」

という罪の自覚です。光の前に闇である。義の前の罪である。生命の前の死であるという。ですから、

「我ほろびたり」

と、この神を見て、自分は全くその前に平伏してしまった。

黙示録にも出ております。たとえば、黙示録1章のところに、ヨハネがパトモスの島でもつてキリストの霊視に合う。天界のキリストに遇いますが、「その目は炎の如く」云々と書いてある。16節に、

「¹⁶その右の手に七つの星を持ち、その口より^{もろは}両刃の^と利き剣いで、その顔は烈しく照る日のごとし。¹⁷我これを見しとき其の^{あしもと}足下に倒れて死にたる者の如くなれり。彼その右の手を我に^お按きて言いたもう『^{おそ}懼るな、我は^{いやさき}最先なり、^{いははて}最後なり、¹⁸活ける者なり、われ^{かつて}曾死にたりしが、視よ、世々限りなく生く。十字架の死を遂げたが、復活して世々限りなく生きているキリストである」と。

また死と陰府との鍵を有てり。¹⁹されば汝が見しことと、今あることと、後に成らんとする事とを録せ。」(黙示録1・16・19)

黙示録は正に、ヨハネがこのような驚くべき顯示にでつくわして、その見させしめられたところを、聞くところのものをどしどし書いていったのが黙示録で、これは絶対に想像したり空想したり考えたりして書いたものではない。パトモスのヨハネもキリストにでつくわして、このキリストの光の前に打たれて、「我死ねり」と言った。このイザヤも、この



聖なる神の栄光の前に、「我ほろびたり」と言つた。

もう一人ある。パウロであります。ダマスコ途上でついに復活のキリストの光に打たれて、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と。サウロは全くキリストに打たれて、そこにぶつ倒れて、目が見えなくなつてしまった。また、耳も聞こえず、ものも言えず、というわけです。三日の間そういうことになった。しかし、アナニヤの執り成しによつて――これは神さまがアナニヤに示された――彼はアナニヤに按手されて、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と、新しくパウロとなつたわけです。

●イザヤの召命

イザヤの召命ですね。6章はイザヤが預言者として立つ、その召命の重大な一章であります。その時に自分の罪の自覚を深くさせられ、神の前に死ねる者のごとく倒れたという。

「罪の価は死なり」

とパウロは言いました。けれども、神さまの審判、光というものはただ相手を審き切るような審判ではない。その審判の中には、奥には深い憐れみが入っている。本当に人を立て、人を活かそうとする、のつびきならない道でありますから。

6 ここにかのセラピムのひとり鉗^{ひばし}をもて壇の上よりとりたる熱炭^{あかきひ}を手にと

ずさえて我にとびきたり。7 わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじ

の唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれなんじの罪はきよめられたりと。

さすがにユダヤの預言書の事態であります。もちろん、この火は聖霊の火です。神の聖なる霊の火です。神の聖なる霊を象徴しているところの火、霊火です。霊火が唇に触れたということは――人間は口をもつて告白する。目は心の窓と言うけれども、また口は心の窓でもあるわけです――いかにこの世の中は、この口の災いでもつて行っているか。国際関係でもそうです。腹の中と外交上のいろんな言葉とはみんな妙な工作がなされている。ネーデルなんていう人は確かなにはらわたの底から告白している口を持っていると思いますが。「平和、平和」と言つて、平和をかざしながら、片一方では大いに戦争の準備をしている。エレミヤも、

「口はいかに偽るものであるか」

と言っている。

「口が火で焼かれる」とは、イザヤの魂が、その心の奥底が火で焼かれるということです。心の窓である心の目が神を見ることができない。罪の目です。また心の表れである口が発することができない。火で焼かれる。悪は除かれ、罪は潔められる。キリストが、

「我れ受くべきバプテスマあり」



と。火の如きバプテスマがあると。それはキリストにとって十字架です。

「この火燃えたらんにはまた何をかせん」

と言う。十字架のバプテスマを受けて、キリストは今度は、聖霊の火のことを言っている。この聖霊の火、十字架の血、これをもつて私たちの贖いは、御霊のバプテスマ、聖霊のバプテスマを受けなければならない。

聖霊のバプテスマはどうしてもその前に、焼き尽くされることがなければならない。潔められることがなければならない。その潔めは、私たちは直かに受けたら、これは正直参つてしまう。しかし、その潔めを本当に信仰の現実において受けとるとは即ち、十字架において、十字架のキリストの贖罪の恩寵の業、これを受けとることによって、私たちが根源的に潔められる。私たちはどんなに手を洗いまして、あるいはイザヤのように火で焼かれるような霊的な幻にでつくわしめても、もしそれだけだったならば、それはダメです。私たちはまたダメになる。

イザヤがここに示されたこの事態は、遠くこのキリストの贖罪の事態を預言するところの霊的な事態なんです。旧約の世界ですから、イザヤは火をもつて焼かれ、そして、そこに彼はその意味において預言者として立つことは、神の摂理のうちにできましたけれども、私たちがただこういったような霊的な異象にでつくわすことを直接に求めて、

「私は天使に焼かれた」

なんて言つて得意になつたら、これはとんでもないはなしです。

私たちが焼かれるのは、贖われるのは、洗われるのは、このキリストの十字架です。十字架の贖罪によらなければ、なにびともどうにもならん。これが即ち、

⁷ わが口に触れていいけるは 視よこの火なんじの唇にふれたれば既になん

じの悪はのぞかれなんじの罪はきよめられたりと。

ということ。召命の時にこのような異象にぶつかったということは、いかにこのイザヤの召命の健全さ、正しさというものを表しているか。聖なる神の前に自分を罪として自覚し、そして、それは罪の潔めという神の恩寵の業、審判にしてまた恩寵の業がここにかかってきたのであります。

⁸ 我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん誰かわれらのために

往くべきかと。

「われら」というのは神と天使のこと。

そのとき我いいけるは、われ此^{こゝ}にあり我をつかわしたまへ。

「われここにあり」というのは、本当に「はい」と。私たちがいうならば、本当に「はい」という答えであります。



●十字架・復活のキリスト

私たちは罪びとで、あいかわらずダメです。けれども、絶対の恩寵ですから。キリストのこの絶対の恩寵、キリストの火です。セラビムの火ではなくして、このキリストの火でもって私たちは潔められたのですから、現実の私がどうであつても、そんなことをくよくよすることはない。

「恩寵の力」

という言葉葉をパウロがテモテ後書の中に言ってます。

「恵みの力」

この恵みの力によって私たちは立ち上げられる。恩寵の力です。プロテスタントの信仰はすぐ「信仰の力」というようなことを言う。これは同じことです。同じことなんだけれども、しかし、むしろ大事なのは恵みの力、グラテアの方です。この火の潔め、聖霊によるところの潔め、この恵みの力によって私たちの中には新しく、キリストの十字架で贖われたところにはどうしたってキリストの霊が、生命が、復活の生命が、聖霊の生命が私たちの中に来るんですから、本当に十字架を受けとっていれば。

十字架を頭で受けたってダメです。

「十字架は私たちの罪を贖ってくれるものです」

という命題をいくら信じ込んでもダメですよ、皆さん。それは理解という範囲です。理解的信仰。わるくはない。わるくはないけれども、そいつは力にはならない。生命にはならない。どうか、

「もう私はそういったことと理解で結構です」

なんていう、そんな高をくららないでください。それでは生命はこないんだから。

「お寿司というものはおいしいものです」

とみんないくら理解したって、おなかは喜ばないですよ、食べなければ。お寿司は食べなければダメです。皆さんもこの十字架という――お寿司どころのさわぎではない――驚くべき、

「贖罪と永遠の生命をくださるところのキリストの十字架・復活」

をいただく。世界の何ものをもつても、どんな財をもつても、これと代えることはできない、全世界とも代えることができないのは、十字架のキリストと復活のキリストであります。

「我は生命のパンである。我をくらう者は永遠に生きる」

という。

「私はお前たちの罪はすっかり贖って、死から生命に返したのだから、さあ私を受けなさい」

と。ヨハネ伝には、「受けろ」と書いてある。「信ずる」ではなくて。

「我を受けよ」



という。ここは、

「我を食べる」

と言う。「我を飲め」ともキリストは言われた。

「わが血を飲み、わが肉を食らえ」

と。

「なんて恐ろしいことをこのイエスという人は言うだろうか」

と、ユダヤ人自身が驚いてしまつて、とんでもないとんちんかな問答をしているではないですか。ところが、キリストはどうしても、「飲め」だとか、「食らえ」だとか言わざるを得ない。私たちもどうか、

「ご馳走のカロリーがどうだ、成分がどうだ」

なんてことを理解するのも結構ですけれども、理解よりも食べた方がいい。食べて、そして本当に力を得た方がいい。

皆さんも、この十字架の贖いによる道――クリスマスに十字架の話をする。仕方がない。これはキリストを本当に迎えようと思つたらどうしても――その道は通らなければ迎えない。キリストの誕生を、いい気持でもつて、幼児のキリストを自分の胸の中にただ宿したような気持だつたら、それは錯覚であります。本当にキリストを迎えるというならば、どうしてもこれは、イザヤと同じようにこの聖なる神の前にぶつ倒れなくては。

●我をつかわしたまえ

神は天使をして火で触れさしめた。熱い。熱いけれども、その熱いのは死への熱さであつたけれども、実はそれは生命への熱さであつた。生命への熱さです。神の白熱の愛です。この神の白熱の愛がかく炎をもつてやつてきた。焼き尽くしながら、これを逆に生命をもつて燃やすという。どんな嵐がきても、消えない。どんなに水をかけたつて、消えないところの火です。そういう火を灯そうと思つて、神さまは来られた。

ですから、私たちが、

「ああこのまま本当に贖われた。キリストはすっかり我を共に十字架につけられた。

あいかわらずゴタゴタしているが、そんなものは問題じゃない。私の中にはこの

キリストの生命が来ていますぞ」

と。これは絶対に十字架の恩寵を百%に受けるその角度から必ず来る。そうしたら、必ず生命が来る。生命が来ていないなら、まだ十字架を本当に受けとつていない。私ははつきりそう言います。

この十字架と復活の生死。私たちは空気を吸おうと思えばどうしますか。まず吐かなければ、吸えないではないですか。自分というものを吐き出して、それから新鮮な空気が入ってくる。それで血は常に新たに潔められていく。常に新たに生命は展開していく。その通り、



私たちの魂は、己というものはこのキリストでもって十字架で吐き出されているんですから。それからあとに来るものは復活の生命ならざるべからず。

そういった十字架・復活のキリストを呼吸して展開していくのですから、もう自分がどんなにマイナスが、「マイナス99」であろうともいいですよ。ここに「プラス1」という驚くべき別な質のものがあるから、こんな「マイナス99」の小池なんていうものはだんだん征服していく。だから、救いの確かさなんです。

「私は自分の信仰がだんだん強くなりましたから救われます」

なんて、そんなことを言っているのではない。とんでもない。驚くべきこの「1」が私に勝っていく。私は一生涯惨憺たる小池でありましたが、いいです。その惨憺たる小池を通して、わがうちなるところのこのキリストは、

「ついにキリストの姿に化するなり」

という驚くべき恩寵の力をもって、恵みの力をもって進んでくださるから、もう平伏してただアーメン・ハレルヤだけです。

そのようにして、内側からとにかく力がくる。なぜ、イザヤが驚くべき預言者として立てるようになったか。その前に彼はぶっ倒された。この聖なる神の審判に合い、そして、審判即恩寵にでつくわしたら、力にでつくわした。この「カードーシュ」「聖」というものは、同時に驚くべき――神とは超絶でありながら、超絶しているものこそ人間の中に限りなく入ってこようとしているところの――愛であるということに気がつかなかったらダメです。聖なる愛。聖なるものは澄まして人を裁いて、

「お前たちは汚い」

なんて言って、遠くの方に神さまはいるのではない。神さまはこの聖なる光を浸透させて、浸透させざればやまずという。

それなのに、窓を閉めて、自分の中を暗くしておいて、自分で勝手に蓄電池で明かりを起こしてみたってどうにもならん。神さまの栄光の光を受けないで、蓄電池ではくたびれてしまう。蓄電池的な信仰だったら、くたびれてしまう。

「自分の信仰」

なんて言って、蓄電池的な信仰だったら。信仰なんか放り出しなさい。そうしたら、この驚くべきものが入ってくる。

そういうのが、イザヤが立ち上がりえたところの、この神の聖です。神の聖によって潔められた。どこまでも平伏するのであって、わがうちにおいて展開するものは神の聖、神の愛でありますから、ひとつも私するものではない。絶対に私しない。これ神のものなり。真理も力も一切は神のものなりと。とかく、どんな善きものでも、これを私したらみんなダメになる。

「我をつかわしたまえ」



というイザヤのこの言葉は本当に、

「我は汝の僕なり」

ということです。「我をつかわしたまえ」と、威張って言っているのではない。

「はい、私はあなたの僕でございます」

と。これが即ち、「我をつかわしたまえ」という言葉の気合であります。「我をつかわしたまえ」ということのできるその魂は、真に神に贖われて捕まえられたところの自由な魂でなければ、「つかわしたまえ」とは言えない。真に僕となる者は、神によつて一切のものに依存しないところの自由をいただいている。天の法則にのつかつて動くところの、風に乗つかつて翻るところの燕のごとく。これが即ち、「我をつかわしたまえ」という、もはや神的な自覚であります。

●されど悟ることなかれ

9 エホバいいたまわく、往きてこの民にかくのごとく告げよ、

さあ、その次の言葉がおもしろい。

なんじら聞きてきけよ^{されど}とらざるべし、見てみよ然としらざるべしと。

「聞きて聞けよ、見て見よ」

という、非常にへブライ語でも強い言い方です。

「お前たち、よくよく聞きなさい。だけれども、悟らない」

という。「悟らざるべし」はもつと強く訳さなければ実はいかん、「されど悟ることなかれ」と。

「聞きて聞けよ、しかれども、しかも悟ることなかれ。見て見よ、されど、し

かも知ることなかれ」

と。単なる「であろう」なんてなことでは困る。口語訳では、「ならない」とあるか。ええ、

だいぶいいです。「なかれ」です。

「悟るなかれ。見て見よ、知るなかれ」と。

10 なんじこの民のこころを鈍くし、その耳をものうくし、その眼をおおえ、

恐らくは

「恐らくは」では困る。この訳では弱い。

彼らその眼にて見その耳にてききその心にてさと^{ひるが}り翻えりて^い醫さるることあ

らん（なからんためなり）。

「あらん」ではない。「なきために」です。非常に強い。もうまるで否定的なことを勧めている。「翻ることなきために」と。

11 ここに我いいけるは、主よいつまで如此^{かく}あらんか。

「主よいつまで」という言葉です。一体、どういう言葉なんですかね。

「なんじら聞きてきけよ然ど悟るなかれ」



と。非常な皮肉な反語的な言葉です。いかにこのイスラエルの民が霊盲であるか、霊的に盲しているか、霊的に失明しているか。このことに対する非常に強い、むしろ怒りと戒めの言葉であると思われます。

「聞きてきけよ然ど悟るなかれ、見てみよ然ど知るなかれ」

と。そんなに簡単に悟られたり、知られるような事態ではない。

「こころを鈍くし、その耳をものうくし、その眼をおおえ。それは眼にて見そ
の耳にてききその心にてさとり翻えりて医さることがないために」

と。「翻る」というのはギリシア語の字にすると、「改心する、悔い改め」という字です。「翻
つて、悔い改めていやされることがないために」と。

「いつまでですか。そんなにみんな封じ込めてしまわれるのはいつまでですか」と。

主こたえたまわく、^{まち}邑はあれすたれて住むものなく、家に人なく、邦^{くに}ことごとく荒土^{あれち}となり、

「荒れ地となるまで」と。そのところでいつぱん切れていいでしょうね。

^{とおきかた}12 人々エホバに遠方にまでうつされ、^{すた}廃りたるところ国中におおくならん時
まで、如此あるべし。¹³そのなかに十分の一のこる者あれども、此もまた呑
みつくされん。

「呑みつくされん」はむしろ、「焼きつくされん」の方がいいでしょう。

されど聖裔^{きよきたね}のこりてこの地の根となるべし。彼のテレビントまたは^{かしのき}樞樹がぎ
らるることありともその根ののこるがごとし。

イスラエル・ユダ。預言者イザヤはこのユダの方の預言者ですから。この関係が切れて
いる不信の状態である。そしてやがてこのイスラエルは――イザヤでそろそろイスラエル
はお終いです、ホゼアという預言者が最後の預言者――紀元前721年にアッシリヤに滅ぼさ
れてしまう。イザヤはこれでやつとあるところの危機を脱せしましたけれども、また、
エレミヤのときになると、紀元前586、587年の頃に滅びてしまいます。

イザヤは、

「この切れている事態は、いくらお前たちは聞いても、それはわからない。大事な
ことは、神との関係をまず取り戻すことである。いかに神の言葉を聞いても、そ
いつは悟れない、わからないということが分かるだろう
と。むしろ、

「この預言者の言葉はわからない」

ということに徹底的に分かって、

「ああ、俺たちは大きな間違いをしていた」
と言って戻るならば、それはいいけれども。

「その預言者の言葉は、いい加減な気持でもってわかるようなことなら、そいつは



偽りである」

といったような気持で、徹底的に心が盲している、目が盲している、霊盲であるということ、こういう恐ろしい言葉でもって言ったんです。

●祭司と預言者

ちょうど、藤井先生が日本の現状を見て、

「日本よ、亡びよ」

なんていう詩を書いてしまった。これは、「亡びよ」という詩を書くのは、今のこんな青年男女の自覚のないご連中でどうして日本が立てるか。それくらいならむしろ亡びた方がましだというような、捨てぜりふみたいな詩ですよ。けれども、これは本当に目覚めて立ち上がってもらいたいという反語的な表現なんです。ここでも、神さまがイザヤに伝えたところの、「悟るなかれ」だとか、「知るなかれ」というような恐ろしい言葉は何ですか。

では、何のために預言者はしゃべるんですか。いくらしゃべっても、いよいよそいつは分からなくて、逆に反抗されるためにしゃべる。本当にそうなんです。エレミヤがそうでした。エレミヤ記20章7節をご覧になると、

「7 エホバよ汝われを勧めたまいてわれ其勧めに従えり。汝我をとらえて我に勝ち給えり。われ日々に人の笑となり人皆我を嘲りぬ。8 われ語り呼わること
に暴逆残虐の事をいう。」

というのは、いかに「暴虐残虐」がこのユダの国に満ちているか。それを遠慮なく言うのと、エホバの言日々にわが身の恥辱嘲弄となるなり。

逆に、「あいつはけしからん。売国奴だ」とか、いろんなことを言われるわけです。

9 是をもて我かさねてエホバの事を宣ず又その名をもてかたらじといえり。

然どエホバのことは我心にありて火のわが骨の中に閉じこもりて燃ゆるがごとく

となれば忍耐につかれて堪え難し。」(エレミヤ20・7-9)

ときたです。まことの預言者は逆に人に嫌われるようなことを言わざるを得ない。それでいよいよ躓きとなり迫害となる。

「預言者はその故里にいれられず」

と、キリスト自身も言われた。けれども、

「お前たちが黙すならば、石が叫ぶときがくる」

と。なんと盛んな素晴らしい言葉だと思う。

これがいわゆる伝道を成功させようなんて、成功というようなことを目安にして伝道をしていたら、それは伝道は半分おかしなことになるし、偽りになる。いわゆる伝道者ではダメなんです。やはりその点では、預言者の角度にならなければ。また、本当の意味において祭司にならなければ。祭司と預言者というものは、私たちクリスチャンにおいて一



つとなっていなければダメです。民のために本当に執り成す人である。と同時に、神の恐ろしい言葉を伝える預言者である。この執り成しと預言、祭司と預言者というものは決して実は二つのものではないので、この使徒たち、キリストの使徒たちは――パウロ、ペテロ、ヨハネ――この連中は預言者的なものと祭司的なものを本当にキリストにおいて持っていた。

キリストは大祭司です、また大預言者です。もうケタが違う。大祭司にして大預言者。大祭司だから十字架にかけて、自分が即ち犠牲いけにえとなった。ただ一遍、天の至聖所に入って――天の至聖所はこの時にゴルゴタです――このゴルゴタの丘の上では即ち、彼にとつて至聖所です。そこで、この至聖所において屠られたる羔となった。それが十字架のキリストです。大祭司は年に一回入って罪の贖いを民のためにしますけれども、キリストは永遠にただ一回、永遠の一回を彼はそこで完了してしまふ。そして、

「汝らの罪の贖いは既に完了した」

とヘブル書の記者は言っている。贖いをただ一回をもつて完了し、それは彼の全実存がそうさせたわけです。そして、復活の生命は私たちに、二千年あとであろうが、何千年あとであろうが、神の国が来るまでこの霊の十字架が立っている。また、復活の生命はいついかなるときにも私たちに臨んでくる。これが一切の時を掌握しているところの永遠のすがたです。そういうキリストの恩寵の中に私たちは今、入っている。

●聖き種

預言者エレミヤもイザヤも、本当のことを言うと、そいつはみんな迫害されたり誤解されたり。

「そいつは彼らが悟らないためだ。なんと彼らは本当のものを受けることができない盲者になっているか、聾者になっているか」

ということを、神さまはかくのごとくイザヤを通して言われた。

「それはいつまでですか」

と言ったら、

「町が荒れすたれて、家もなくなつて、荒廃してしまうときだ」

と。エレミヤも、エレミヤ記 4 章で、

「ああ、わが腸はらわたよ、全地はもう空しくなつて、飛ぶ鳥さえもない。荒廃してしまつた」

と。やがて、滅亡の預言をさせられている。

もし、日本も福音を本当に受けとるところの民が、あなた方若い人たちの間に本当にこのことが生じてこなかったならば、もう日本は望みはないな。最後の問題は、

「福音を本当に受けるかどうか」



という、この土壇場にきているんです。どういう深刻な第三の災いが――20世紀はもう二回大戦争をやった――第三の戦争が、第三の災いがきたらば、全世界はおかしなことになるでしょう。

けれども、そのときに、皆さん、その先を読んでください。

¹³そのなかに十分の一のこる者あれども、此もまた吞みつくされん。されど
きよきたね
聖裔のこりてこの地の根となるべし。

という言葉がある。イザヤ書でドイツの学者がイザヤの「遺されたる民の思想」と言いますが――「思想」ではない。これは上からの示しですから――この遺されたる「聖き種」。これも「ゼラッハ カードーシュ」「聖きたね」と言いますが、ギリシア語でいうと「スペルマ」。キリストの御霊のことを「神のたね」という言葉がパウロの言葉にあります。

彼のテレビントまたはかしき櫃樹がきらるることありともその根ののこるがごとし。

切られても根は残っている。焼かれてもなお根は残って、そこから芽を吹き出す。切られても根の残っている、この根つこのようなクリスチャンにならないければダメです。いくら火事がきても、焼かれても、そのあとから芽を吹き出すようなクリスチャンに。

それはいわゆる聖書のことを理解しているようなことではダメです。これは本当に、さつき言ったように、食らっていないければ、飲んでいなければ。この聖書の現実の中に自分を投じて、この大きな驚くべきドラマの活中の人物に自分になっていないければ、聖書を読んでいるとはいえない。即ち、活中の人物となつてその中に、

「私も聖書の中の一人です。隠れていますよ」

といったようなわけです。それが根つこのクリスチャンです。根つこは、この聖きたね、聖霊が、キリストの霊が私たちの中にきてなければ、この根つこのクリスチャンにはならない。だから、遺れる者に――クリスチャンはたくさんいる。まあ日本にはそう多くはないけれども、それでも、たくさんいる――本当に根つこのクリスチャンになること。どんなに嵐がきても、どんなに迫害がきても、どんなに誤解されても、大丈夫ですという。

● 神の靈法

それはどうして大丈夫なんですか。キリストの御霊が来ているから。御霊が来ている。自分の信仰なんていうものではない。自分の信仰なんかひとつも大丈夫ではない。私は、自分の信仰に頼れと言われたら、もう私は落第します。ああ。私は自分の信仰なんか当てにしない。信仰というものは、キリストがいかに素晴らしいかということに信することなので、自分なんかを信じていないんですから。キリストという言が、

はじめ ことば
「太初に言あり。言は神と共にあり。言は神なり」

と。キリストという言が我という人になるという、この「信」に、この根つこの信に、根つこの信者になる。根つこの信者ならば、国が荒れ果てましても、世界がどうなつても、



ストロンチウム90かなにかの放射能で私たちの肉体がどんなに蝕^{むしば}まれても、それでもどっこい死にませんぞと。肉体が死んでも死なない。霊体は、魂は絶対にキリストの中にあって死なない。キリストの生命は一切のものに勝ち得てあまりあるところの生命である。神の秩序、神の驚くべき秩序を破壊するようなことを人間がおつ始めてきたから、これは由々しき事態である。神の恩寵を利用することはいいですよ。けれども、秩序を破壊するようなことをしたらダメです。「自由、自由」と言うけれども、秩序というものが立たないような自由なんてものは決して自由ではない。それはもうレッシングだつてゲーテだつて言っています、

「本当の法則に従うことが真の自由だ」

と。キリストは、神さまの意志という驚くべき神の靈法に、

「汝の意志を成させたまえ」

と言って、神の意志、神の靈法に従ったから、彼は自由である。物理世界でもそうです。物理法則に従っているのを自然と言うではないですか。同じように、魂は神さまの法則に従っているのを自由と言う。自由と必然とは全く同じです。奇蹟も何もありません。

「奇蹟を信じます」

なんて、何を言っているか。私たちには、奇蹟という表現で言うところの、神の驚くべき法則の世界が読めないから、「奇蹟だ」なんて言ってますけれども、神さまの方からはちゃんと驚くべき法則がある。

そういう「聖きたね」ということ。

「されど聖裔^{さいよきたね}のこりてこの地の根となるべし」

と。どんなに荒れすたれても、日本がどうなつても、世界がどうなつても、そこからもうひとつ新しい新人類が復活していくという者は、これは本当に神の光を、栄光を、生命を受けている人たちであろうと思う。それは、「キリスト」の「キ」の字も知らない人もその中にあるかもしれない。それは知らんです。神さまの方はちゃんと人を選んでいる。

とにかく、この真の存在というものがその次から出てくる。しかし、私たちはとにかくこの驚くべき恩寵の世界に目を覚まされつつあるんですから。これを左顧右眄することなしに、深く入っていききたいと思うのです。

●シャルヤシユブ

イザヤ書7章に入ります。

「ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズ^{のぼ}のとき、アラムの王レゼンとレマリヤの子イスラエル王ペカと上りきたりてエルサレムを攻めしがついに勝つことあたわざりき。

ここにシリヤ、あるいはアラムというのがある。それからサマリヤ。イスラエルはエフ



ライムともいう。エフライムの首府はサマリヤ、その地方もサマリヤという。それからシリヤの首府はダマスコ。アラムの王レヂンがエフライムのペカと――ペカの前の王様を倒してその傀儡王としてのペカを立てた――エルサレムを攻めてきた。エフライムはシリヤと同盟を結ばされて、シリヤ・エフライム同盟がもうひとつユダを入れて――即ちイスラエルはちよつと買収されたような形になって――ユダを一緒にして、シリヤ・イスラエル・ユダというものが同盟を結んで、このアッシリヤは強国ですから、それに対抗しようという政策できたわけです。ところが、このユダの王様のアハズはそちらに組みしないで――アッシリヤが恐いものですから――自分はアッシリヤに組みしようと言って、アッシリヤに大いに依り頼もうとする。そのくせ、この二つの国もちよつと恐いものですから、急いでこのアッシリヤと結託しようというような情勢なんです。それが、このアハズというだらしない王様です。

2 ここにアラムとエフライムと結合^{むすびつら}なりたりとダビデの家につづる者ありければ、王のこのころと民の心とは林木の風にうごかざるが如くに動けり。

というのがそのことです。北からその同盟軍が来たものですから。そして、非常に動揺して、アッシリヤに依り頼もうとした。ところが、預言者イザヤが、

「そんなことではダメだ。なぜ、神への信頼をしつかりしないか」と、アハズに対して告げよと。

3 その時エホバ、イザヤに言いたまいけるは、今なんじと汝の子シャルヤシュブ

「シャルヤシュブ」というのは「シエアル・ヤーシュューブ」といまして、「シエアル」は「遺れる者」、「ヤーシュューブ」は「帰ってくる」ということで、「シエアル・ヤーシュューブ」というのは、

「遺れる者、帰りきたらん」

という意味です。イスラエルの人の名前はいろいろ意味があります。これは神さまからそういう名前をいただいた。

と共にいでて布をさらす野の大路のかたわらなる上池^{かみのいけ}の樋口にゆきてアハズを迎え、

アハズが籠城しようと思って、水がなくなると困りますから、その水源地を見に行った。そこへイザヤが出掛けて行つて、そしてアハズに会うわけです。

4 これに告ぐべし、なんじ謹みて静かなれ、

風に吹かれて揺れるような林のような心ではダメだと。イザヤはよくこの「静かなれ」ということを言います。

アラムのレヂン及びレマリヤの子はげしく怒るとも二つの燼^{もえのこ}余りたる煙れる片柴^{はしば}のごとし。



あんなものは燃え残りの柴の枝みたいなもので、今にみんな倒れてダメになつてしまふから、そんなものは恐れなくていいと。なかなか表現が凄いですね。

懼るるなかれ、心をよわくするなかれ。⁵アラム、エフライム及びレマリヤの子なんじにむかいて悪しき謀^{はかり}ごとを企てていう、⁶われらユダに攻め上りて之をおびやかし我等のためにこれを破りとり、タビエルの子をその中にたてて王とせんと。⁷されど主エホバ云いたまわく、この事おこなわれずまた成ることなし。⁸アラムの首^{かしら}はダマスコ、ダマスコの首はレヂンなり。エフライムは六十五年のうちに敗れて国をなさざるべし。⁹またエフライムの首^{かしら}はサマリヤ、

「首^{かしら}」というのは首府のことです。

サマリヤの首はレマリヤの子なり。若しなんじら信ぜずばかならず立つことを得じと。

「若しなんじら信ぜずばかならず立つことを得じ」

とは非常に古典的な言葉で、この「信ずる」という言葉がまっ先に出てきた非常に古い文献とされている。イザヤの同じような内容は、今の7章9節、28章16節、30章15節に同じような大事な言葉が出ています。

●信ぜずば立つことを得じ

「信ぜずば立つことを得じ」

という、預言者イザヤの大事な音信はこの神への信頼であつた。

日本人は天皇陛下に信頼している。ですから、天皇陛下が現人神^{あらひとがみ}みたいな時代は、とにかく日本というものはあるひとつの統一体をなしていた。日本の軍隊も、

「陛下のためには水火も辞せず」

というような素晴らしい気合を持っていた。だから、日本の軍隊はある意味において世界に冠たる強さを持っていた。この頃の防衛隊なんていうのはどうだかしりません。ところが、どうも天皇陛下はちよつとちがったことになつてしまった。しかしまだ「天皇」とは申し上げているわけですが。本当の天帝という――昔の漢語か何かの訳には神さまのことを「天帝」と訳していた――この天帝であるところの神まで日本人がもうひとつ突き抜けなくては。せっかく素晴らしい構造なんです、この君臣という構造は。君臣という構造は確かに素晴らしい、日本民族に与えられたひとつの秘義を隠していた。そうしたらば、本当の君に――「キング・オブ・キングズ」という君の君、王の王であるところの――神へ、なぜ日本人は突き抜けなかつたか。神さまに突き抜けて、そして、「人の上に人なく人の下に人なし」というが、

「人の上に神あり」



となぜ言わないか。この「人の上に神あり」ということになぜ、大きく突き抜けないか。これは内村先生が本当にそのことを嘆いておられる。

「そんなことをして本当に福音を入れなかったらば、もう日本は今に必ずやつつけられて亡びてしまつ。一切、地にまみれてしまつ。」

と。

「それでもなお日本は立ち上がることができるであらう」

とは言っておられましたけれども。明治36年に既に滅亡の預言をしておられる。内村先生は非戦論者ですからね。えらい魂ですよ。

だから、イザヤが、

「信ずれば必ず立つ」

と、この偉大なる神に信頼して、武器も何もいらん。在り方が、実存が本当にしつかりしているならば、必ず立つことができる。正直、イザヤはこの驚くべき信頼をもつて勝利した。アッシリヤの軍がエルサレムをいつぱん包囲した時に、どうですか。紀元前701年、包囲軍が一夜のうちに驚くべき病死をしてしまった。病にうたれて、みな仆れて散々な目にあつて、みんな逃げて行つてしまつたではないですか。あれはイザヤの信頼が勝利した。イザヤの信頼がその危機を脱せしめた。

日本も本当に文化というならば、徹底的に他を愛す、隣国を愛し、世界を愛するという角度の魂となることです。私たちは素晴らしい世界一の日本刀を持っていたが、大和魂は、日本刀はいらん。本当の大和魂は、世界に光を放つところのものとなりうる素質を持っている。これはどうしても、絶対者にぶつかつたらそうなる。日本人はこの絶対者にぶつかる同然のところまで来ているのに、なぜそこを突破しないかということが残念です。

どうか、皆さん、そういった使命を帯びているんですから。人の前にはどんなに小さいような存在でも、そんなことはいい。この日本を一人の人が本当に、あなた方一人が、一人の少女が、ジャンヌ・ダルクのように背負うことができるんです。このキリストの力は、生命はそれ以下ではないのですから。キリストを受けるといふならば、もう水を割らずに限りなくこれを受けとつてください。

●神の栄光の体現体

クリスマスは何のために私たちは迎えるか。この驚くべきキリストを受けるときに、一人びとりがこの栄光となる。これは何という花か知りませんが、こういう赤い花になる。それから、これは黄色くなる、これは藤色になるといふわけで、それぞれみんなのつぴきならない栄光の顯れ方をするわけです。

「信ぜずば立つことができない」

と。しかしながら、受けとつたならば、本当に立つことができる。日本の最大の力は何か



といえば、せっかくいろんな素晴らしい素質を持っている日本人が、このキリストを受けとること。キリストを受けとると、何か狭いものに――「狭き門」なんて言うものだから――狭いものになるように思う人が大勢いますけれども、そのキリストという狭き門の向こう側はもの凄く広い世界なんだから、無限に。どうか、それを誤解しないで受けとっていただきたい。一切の真理がこの中に入っている。一切の真理を認識するような力が必要になります。そしてまた、創造力が展開し始める。

どうかもうケチ臭い考えはやめて、これをやってください。そして、あなた方の生涯の使命とするところをキリストの栄光として、

「その栄光は全地にみつ」

という、一体その栄光はなぜ、全地に満つるのか。その一人びとりの魂に、露のごとき魂に宿って、神の栄光が今度は顕れる。さっきの「カーボード」が。一人びとりを通して神の栄光が顕れる。栄光の顕れる表現体、表現体に皆さんはなっていたきたい。

だから、

「鼻から息の出入りする人間をなぜ恐れるか」

とイザヤがその2章かどこかで言っているではないですか。

「なにを恐れるか」

と。畏れるものはこの神。そして、神を畏れる者は逆に人を愛していくんです、どん底から。聖なる神は、審くためではなかった。驚くべき白熱の愛をもって私たちに臨んでくる。これが入ってくれば、一切のものを展開し、包含し、すべてを包摂していくようなことです。

教会がいくつあってもいい。何々教会があってもいい。みんな千種万態で結構です。おいにそれぞれの特色を現してください。しかし、そこに本当のものがみんな光っていれば、それは大きなハーモニーになる。その大きなハーモニーになる本質を持たないで、いくらハーモニーをしようと思つたって、バッハをいくら聞いても、ベートーベンを何のかんのかんと言つても、レンブラントをどうの言つても、彼らの奥はどこから出ているか。その奥の世界を本当にさぐらないで、いくらヘンデルのやれベートーベンのと年の暮れにやつてみたって、ヘンデルもベートーベンも天界で嘆きますよ。

「何を歌っているか。その魂がなければ」

と、こう叫んでいる。

どうか、皆さん、このことに気がついたならば、福音というものは素晴らしい驚くべき迫力と、無限の幅と広さを持っているということを証してください。ケチな教派的なことを言っているのでは絶対にはずかしいですから。

●私を本当に求めよ

10 エホバ再びアハズに告げていいたまわく、¹¹なんじの神エホバに一つの



予兆^{しるし}をもとめよ、或はふかき処^{しるし}あるいは上のたかき処^{しるし}にもとめよ。

「ふかき処」とは地獄、暗黒、陰府の世界に、また高き処、天界に求めよと。

¹²アハズいいけるは我これを求めじ、我はエホバを試むることをせざるべし。

神さまに徴を求めない。神さまを試みることはしない。いかにもそれは良きそうなことだ。キリストがあゝの荒野の試みでサタンをやつつける時に言われた言葉です。聖書の言葉だつて困るですね。同じ言葉がいろんな使い方をするから。ちよつとこの答案を見ると、アハズはなかなか信仰の深い正しい王様のように聞こえる。けれども、同じ言葉を使いながら、キリストの場合と違う。この時には、

「なんじの神エホバに一つの予兆^{しるし}をもとめよ」

と。徴を徴として求めることはいかん。けれども、神さまの方からは、

「今、自分は本当に恵みを与えようとしている」

ということ。この前、「言い逆らいの徴」に書きましたね。「セイメイオン」、徴という。徴の徴はキリストです。最大の徴はキリストです。私たちはキリストを求める。

「求めよ、さらば与えられん」

という。何を求めるんですか。キリストを求める。キリストを求めて、与えられないことは絶対にない。他のものを求めたら、それは与えられないかもしれませんよ。けれども、キリストというこの徴だけは絶対に万人に与えられる徴であります。

神さまがここに、「ひとつの徴を求めよ」と言われたこの徴は、ただ御利益的な徴のことを神はこの場合言われたのではないので、救いの基となるところの驚くべき徴を今、神は与えようとしている。神の「徴を求めよ」と言つて、

「神の栄光の顯れるところをしっかりとつかめ」

と。私たちは神を見ようとしたつて、わからん。

「我を見し者は父を見しなり」

と。即ち、キリストは

「自分を見た者は父を見たのだ」

と、キリストは父の徴として顯れている。だから、この「徴を求めよ」という言葉は、逆に言うと、

「私を本当に求めよ」

という奥の言葉が入っている。

「なんじの神エホバに一つの徴をもとめよ。私はそこにいる。私と離れたものではないぞ」

という。神さまと離して、徴なんて求めたら、これは御利益になります。しかし、その徴において神を見ていく。いいですか、皆さん。聖書の言葉においてその言葉の背後に、「我を証するものなり」とキリストが言っているこのキリストを求める。



「神を求めるキリストを求めていく」

のがこの「徴を求める」本当の正しい行き方なんです。御利益でも観念でもない。そこにおいて神にぶつかるかどうか。そこにおいて神にぶつかる。野のひとつの花を見て、キリストは神の栄光を見た。神の徴を見た。

●インマヌエル

それなのに、

「アハズいいけるは我これを求めじ、我はエホバを試むることをせざるべし」

と、余計な答案を書いた。ちよつと、方程式ではよさそうな答案ですけれども、これは観念信仰の落第であります。だから、真理は極めて実存的な把握を要するのであつて、方程式的な真理を方程式的に覚えても、それはダメです。生命がつかつてこない。聖書の同じ言葉をサタンが使いますよ。同じ言葉をキリストが使いますよ。けれども、それはまるでその方向が違う、掴み方が、質が、次元が。だから、これはちよつとよさそうだが、これはダメなんです。

13 イザヤいいけるは、ダビデのいえよ請うなんじら聞け、なんじら人をわずらわしこれを小事^{ちいさし}として亦わが神をも煩わさんとするか。

「人を煩わして、私がこんなに神さまに執り成しをしているのに、相変わらずそんな妙なことを言っているか。私がこんなに信頼しているこの神さまを煩わそうとしているか。それでは、汝は本当にわが神と同じ神さまではなかったようだね、そういう神さまの拝み方では、掴み方では」と。

14 この故に主みずから一の予兆^{しるし}をなんじらに賜うべし。視よおとめ孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。

これは学問上なかなか問題のある言葉でありますけれども、そういったようなことは今は一切やめておきます。この「おとめ」というのは、いわゆるマリヤにおけるような「おとめ」という意味においては学問上ないようです。「若き婦人」ということで一応いいようではありますが。それは一体、誰だか一向わからない。いろんな説がある。

「視よおとめ孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし」と。「インマヌエル」は「神我らと共に」という意味です。

15 かれ悪をすて善をえらぶことを知るころおいにいたりてちようどもの心がついた頃おい、

乳酥^{にゅうそ}と蜂蜜とをくらわん。

バターみたいなものと野蜜みたいなもの、

16 そはこの子いまだ悪をすて善をえらぶことを知らざるさきになんじが忌みきらう両^{ふた}の王の地はすてらるべし。



「ふたりの王」というのはさっきのシリアの王レジンとエフライムの王ペカです。これはアッシリヤにのまれてしまう。

17 エホバはエフライムがユダを離れし時よりこのかた臨みしことなき日を、これは亡びの日ですよ、

汝となんじの民となんじの父の家とにのぞませ給わん。是アッスリヤの王なり。

このことをするのは、神さまの鞭となるのはアッシリヤの王様なんだと。

14節のこの言葉をマタイ伝1章23節でもって、キリストの預言としてこのマタイの記者はつかまえたわけです。ちよつとそここのところを読みます。18節から、

「18 イエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖霊によりて孕りたること顕れたり。

19 夫ヨセフは正しき人にして之を公然にするを好まず、私に離縁せんと思う。

20 斯てこれらの事を思いめぐらしおるとき、視よ、主の使、夢に現れて言う『ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖霊によるなり。』
21 かれ子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救い給う故なり』

「イエス」というのは「救い」という字ですからね。

22 すべて此の事の起りしは、預言者によりて主の云い給いし言の成就せん為なり。曰く、
23 『視よ、処女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと称えられん』之を訳せば、神われらと偕に在すという意なり。
24 ヨセフ眠りより起き、云々」(マタイ1・18〜24)

イザヤは自分の子どもに、

「シエアル・ヤーシューブ」「遺れる者帰りきたらん」

と名付けました。根っこのごとき遺れる神の民が、散らされてもなおエルサレムに帰ってくるぞと。どんなに不信であっても、しかし、その中に神への信頼をもういつぺん取り返すならば、救いの基が与えられる。これはイザヤがもう既にひとつの示しを受けて、その救いの基となる者を、「インマヌエル」「神我らと共に」という素晴らしい名を与えられて預言したわけです。

●我れ汝と共に

「神我らと共に」

と。これは徴だと言う。それで私は思い出すのは、出エジプト記3章12節の、モーセに神さまが言われた言葉です。エジプトにあるイスラエルの苦しみを神は顧みてモーセに、

「お前はあのイスラエルを、ヨセフを中心とした族をカナン(今のパレスチナ)へ連



れて行け」

「私にはできません」

と。とてもそんなことはできませんとモーセは固辞した。けれども、神さまは、

「いや、心配はいらん。恐れるなかれ」

と言われた。

「¹²神いいたまひけるは、我かならず汝とともにあるべし。是はわが汝をつかわせる証^{しるし}なり。汝民をエジプトより導きいだしたる時汝等この山にて神に事^{つか}えん。」（出エジプト3・12）

と言っている。

「私がお前と一緒にいるぞ。我れ汝と共にあり」

と。さっき言った恩寵の力です。恵みの力。神さまの方から、

「我れ汝と共に」

という声が響いてきたらば、「神我れらと共に」というこの告白は、「我れ汝と共に」という告白のもとに出てくる。

私たち一人びとりが、「我れ汝と共に」と告白する。有名な詩篇23篇にあるではないですか。

「⁴たとわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害^{わざわい}をおそれじ。なんじ我とともに

在^{いま}せばなり。」（詩篇23・4）

と。

神さまは、「我れ汝と共に」と言い、詩篇23篇で、

「なんじ我とともに在^{いま}せばなり」

と答えている。モーセに対して、「我れ汝と共に。これが徴である」と。お札^{ふだ}でも何でもない。

「私がお前と一緒にいるということが徴だ」

と。詩篇23篇がこれに応えて、

「神が、汝が我と共にいませば、私はたとえ死んでもちつとも死にません。死の陰の谷を勝利をもつて進んで、次の世界へ参ります」

と。「我れ汝と共に」というのはどこからくるか。イザヤはさつきどうしたか。贖いの火にぶつかった。私たちはキリストの十字架の贖いにぶつかった。そうしたらば、キリストは実は私たちの中に入ってきておられる。キリストは私たちの中に聖霊のキリストとして宿りたもう。御霊のキリストとして宿りたもう。これ、「我れ汝のうちに」の世界です。パウロは、「我れ汝のうちに」という世界を、

「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

ということを書簡の中で百何十回と使っている。この「うちに」という世界。私たちクリスチャンは、

「キリストは私たちのうちに」



と言うときに、初めて「我れ汝と共に」と言える。超越の神が、超在の神が本当に私たちと共にありたもうということの確証はどこからくるかというところ、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

というこの土台において、この確証において初めて、

「ああ、神さまは一緒にいてくださる」

と言える。これがなかったら、この「うちの」の世界がなかったら、言えない。

●インマヌエルのキリストわがうちに

旧約ではそこはまだおぼろですよ。おぼろだけれども、この預言者たちはとにかく神の御霊によって加持されているところの人たちです。とにかく、その世界に入っている。ですから、まだキリストの恩寵みたいにはつきりはしませんけれども、それはすべてが旧約は新約への預言なんだから。我々は新約の世界にきて、

「このいと小さき者も預言者よりも大きなものである」

という。なぜ、キリストはそう言われるか。

「イザヤは素晴らしい預言者だ、とてもかなわない」

と。そうです、その通り。けれども、イザヤもお到達することのできない世界に私たちは到達せしめられる。イザヤが生涯を通して実存的に証言したところのものは、キリストを指していた。このキリストが私たちの中にきたらば、

「汝わがうちに、われ汝のうちに」

というこのキリストの世界から、「神我らと共に」ということは、今度は楽に喜びをもつて確信をもつて言えるようになるわけです。だから、

「その名をインマヌエルと称う」

と。即ち、この不思議な子どもは神の子である。神の子の預言を、イザヤはその自覚を持っていたかは知らんですよ。けれども、イザヤがこんなことを言わしめられたのは、その中にはこの言葉が既にあるひとつの預言を彼自身知らないうちに、しているわけです。そこに預言の素晴らしさがある。占いではないんだから。本質的な取っ組みをして、そこから受けとった言葉は、イザヤの自覚以上の言葉がそこに発せられる。神のみ知りたもうところの内容がそこに宣言されているわけです。

それで、この「インマヌエル」（神我らと共に）というのは私たちにとつては、「インマヌエル」という名前の実体を、正にそれはマタイ伝 1 章 23 節がつかまえたこの実体を、私たちがうちに宿すときに、「インマヌエル」ということが私たちに本ものになる。それでなかったら、「インマヌエル」は本ものではない。「インマヌエル」という実体を私たちがうちにいただくことでなければ、私たちにとつて「神我らと共に」というのは空言にすぎなくなる。キリストを宿すときに初めて「神我らと共に」ということになります。今のモーセの場合も、



詩篇の場合も、これが私たちにおいては、この

「インマヌエルのキリストがわがうちに」

ということ初めて本当に「インマヌエル」「神我らと共に」ということが本ものになる。

この預言は、この危機において、イスラエルが既にもう亡びようとしている、それからユダがやがて亡びます。それでもなお、どんなに亡びても、焼かれても、エルサレムが荒廃に陥っても、樅の木が滅びても、その荒廃たる荒野の中からお根つこが残っている。聖き種、根つこが残っている。根つこの存在が芽を吹き出して、そして神の国が建設されていく。

これからどのような20世紀の後半が私たちにくるかわからん。みなそれぞれの使命において、文化的にすべて営むことは大いにやったがいい。けれども、根本はやはり、もしその人の営みの奥に根つこである福音が、「原始福音」「ウル・エバンゲリウム」が化体していなかったら、インマヌエルなるキリストが我がうちにいなかったならば、すべての業は空しくなる。けれども、これがあるならば、どんなにすべてが失敗に終わって一生は惨憺であつても、どんなに惨めでありまして、どつこいそれは神の国を建設していくところの石である。このことはまたイザヤ書8章にいきまして、もうひとつ力強い言葉になって表れてきますが、それは祈禱会にいたしますけれども。

皆さん、どうか、クリスチャンであるということとはなんと驚くべき「カーボード」を、光栄を担っているか。神の歴史の一環をみなそれぞれのつびきならない役割を果しているのです。この現実、この根、源、現実、この根つこの存在の一人びとりになっていく。いいですよ、数はどうしても、質は本ものであるならば。いい加減な者が

「百万人といえども我行かん」

と、孔子が言ったではないですか。いわんや、キリストを持つている者は大丈夫。どうか、皆さんがその根つことなつて、そして大いに枝を伸ばして周りを幸いにしてください。葡萄の木の実が成るようにね。詩篇80篇かどこかにあるように。神の葡萄の木が全世界に広がっていくようなことが書いてある。

● 祈り

聖なるまことのおん神さま。主イエス・キリストの父なる神さま。この1957年のクリスマス、東西南北から今、一切のものを乗り越えてこの幕屋に来てくださいました。この僕、まことに何の取り柄もない者でございますが、しかし、共に主キリストの生誕を私たちの魂の中に、存在のうちに迎え奉り、インマヌエルなるキリスト・イエスを我々の中に迎え奉ることにより、真に私たちもまた「インマヌエル」と言つて、互いに大きなスクラムを組み、手をにぎり、ベートーベンが

「幾百万の人たちよ、あい抱け」

と言つたそのシラー、ベートーベンの祈りの歌は即ち、その発するところはキリストによ



って初めて可能な世界であることを知るのであります。かの偉大なる第九シンフォニーも、その根は実に福音から発しているところの事態であります。どうか、一切のことが福音にその根を置いていくことに気がつき、またこのことのために、私たちは本当に生涯を通して証していくことができますように願ひ奉ります。

20世紀の後半は今、いろいろな危機に臨んでおります。しかし、時にあたって、クリスマスといいいながら、真に担いをしないならば、誠に申し訳なきことであります。私たちには何もできません。しかし、キリストに在って、

「おのが十字架を負いて我に従え」

とは誠にキリストの十字架が負わせてくださるところの驚くべき恩寵の力であることに気がつき、勝利また勝利して行きます。アトラスのように地球をもたげるが如く、キリストは一切を掌握しておられますが、どうか、その傘下に入り、世界に災いを来らしめないような防波堤となることができますように。また、闇をつん裂くところの燈台となることができますように。しかし、次はどんなに聖書が預言するような荒廃がたとえやって参りましょうとも、どうか、その中に根つこ的な存在を遺してくださるように。その根つこ的な存在が一人でも多くあらんがために、私たちの生涯を労せしめたまわんことを願ひ奉ります。

お父さま、救いが全世界に臨むことが本当にあなたの聖なるご意志であることを思い、どうか、僕らをできるだけ使いたまわんことを願ひ奉ります。このことが全世界の教会、クリスマスチャンにおいていよいよ新しく自覚され、そして、世界に本当にクリスマスがキリストの平和の、本当の実力の力が臨み、今、我々のいろいろな波風を吹き飛ばすことができますように願ひ奉ります。

いかんともしがたい人間の大きな罪です。しかし、誠に聞けども聞くことができず、見れども見ることができない、人類の私たち共同のこの罪。どうか、天より御霊の声、また光、突ん裂きまた響きわたりたい、私たちの眠れる魂を目ざまし、いずこにおいても、神さま、あなたに接し、キリストを迎え、そして進んで行くことができますように、証して行くことができますように願ひ奉ります。

このようにして、このクリスマスの午前を兄弟姉妹たちと共に、新たにこのキリストの十字架に死に、そして新たにイエス・キリストを迎え奉り得たことを感謝いたします。どうか、私たちはダメですが、いよいよダメなればこそ、キリストがいよいよ素晴らしく働き給う、この弱さにおける強さを受けとっていくことができますように願ひ奉ります。

かくして、一年また一年と、前進また前進、どんなに躓いても転んでもなお前進あるのみであります。どうか、このような勇ましい、また喜ばしい生命の展開をなさしめたまわんことを願ひ奉ります。今日は珍しい方々も来られました。この喜びを共にすることができて感謝であります。今、心からの感謝と願いを聖名により捧げ奉る。アーメン。

